茂木善作先生 展示コーナーより

鳥海小学校の職員玄関付近のカップ棚に、本校卒業生、茂木善作先生の展示コーナーを設置しております。皆様もすでにご存じのように、アントワープオリンピックのマラソン選手として、大活躍した大先輩であります。ＮＨＫ大河ドラマ「いだてん」でも、第１回箱根駅伝でアンカーとして１１分３０秒差を大逆転し、優勝テープを切った立役者でもあります。茂木善作先生のお孫さんにあたる、豊原在住茂木敏彌さんのご厚意により、茂木善作先生にまつわる数多くの記念の品々を展示させていただきました。ぜひ一度、鳥海小学校に足を運んでいただき、茂木善作さんの偉業の一端をご覧いただければ幸いに存じます。月曜日から金曜日まで９：００～１６：００であればいつでもご覧になれます。

我らが大先輩 茂木善作先生 ２つの偉業

１　アントワープオリンピックマラソン出場
第２０位（山形県初のオリンピアン）

２　第１回箱根駅伝大会　第１位（１０区）
アンカーとして１１分３０秒差を逆転
主将として記念すべき第１回大会で優勝

おらほの欅（たすき）

箱根駅伝100回 上

茂木善作 第1回逆転V

酒田で顕彰 本県初の五輪選手に

東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝＝読売新聞社共催）は、年明けに第100回の節目を迎える。第1回大会は1920年2月14、15日に開かれ、優勝した東京高等師範学校（現・筑波大）のアンカーを任されたのは、酒田市出身の茂木善作（1893～1974年）だった。

当時は4校のみの参加で、2位でたすきを受けた時点では、前を走る明治大とは11分52秒の差があった。だが茂木は猛追して逆転し、25秒差をつけてゴールテープを切ったという。

山形県師範学校（現・山形大地域教育文化学部）を卒業した茂木は、遊佐町の蕨岡尋常高等小学校で教員を務めていたが、長距離走選手への憧れから約5年で退職。東京高等師範に入学して第1回大会に出場したという。大会の約半年後には、箱根駅伝を創設した金栗四三（1891～1983年）らとともに、マラソン日本代表としてアントワープ五輪に出場し、本県初のオリンピアンとなった。

筑波大の真田久・特命教授（スポーツ人類学）は「第1回大会優勝の立役者で、大会の歴史の中でも存在は大きい。その後もマラソンの普及に尽力し、日本陸上界の草創期の一端を担った」とたたえる。

◇

出身地の同市本楯地区では、茂木の功績を後世に残すため、住民らが65年に「茂木善作顕彰会」を発足させた。新型コロナウイルスの影響で中断されているものの、地区の運動会で茂木の名を冠したマラソン大会を開いていたほか、地元小学校の持久走大会でメダルを贈るなどの活動を行っている。

同会の富樫純一会長(75)は「茂木は地元の偉人。地域の歴史を残すために、功績を子供たちに伝えていきたい」と語る。

酒田市も、67年に「茂木杯マラソン大会・駅伝大会」（現・湊酒田つや姫ハーフマラソン大会）を創設。現在、ハーフマラソンの部の総合優勝者には「茂木杯」を贈っている。

◇

茂木の名は、2019年のNHK大河ドラマ「いだてん」で、第1回大会の逆転劇が描かれたことで全国に知れ渡った。

放送を機に、茂木の母校である現在の同市立鳥海小学校では、茂木のゴールの瞬間を収めた写真や、五輪直前に家族に宛てたハガキなどを展示するコーナーを昇降口付近に設けた。当時の校長が遺族に依頼し資料の提供を受けたという。

同校では現在、高学年の総合的な学習の時間に、郷土の偉人として茂木の足跡を学ぶ。「茂木は地域の誇り。夢を持って挑み続けることの大切さを彼から学んでほしい」と斎藤清志校長は語る。

同校の卒業生で、市立鳥海八幡中3年の小松亮毅（りょうき）君(15)は6年の時、学習発表会で茂木の人生を紹介する劇を披露した。今春、校内で駅伝チームのメンバー募集があった際には、茂木の箱根での活躍を思い浮かべ、水泳部に所属していたが迷わず応募した。チームは地区予選で3位に入り、目標だった県大会出場を果たしたという。

小松君は「苦しいときこそ、仲間と支え合って乗り越えることの大切さを学んだ。これからも走ることを楽しみたい」と語った。

◇

100年以上の歴史の中で、本県出身の多くの選手たちが箱根路に挑んできた。そんなランナーたちの足跡をたどり、節目の大会に臨む選手らの思いに迫る。

アントワープ五輪出場前の茂木の写真を手にする斎藤校長。酒田市立鳥海小に他の資料とともに展示されている（18日、酒田市本楯で）

箱根駅伝第1回大会で優勝のゴールテープを切る茂木（1920年撮影）